

<http://ncbungaku2013.web.fc2.com/>

日・中文学翻訳館／趙清閣 #SE-6

2018. 5. 3



←旧上海美術専門学校



旧天一映画会社→

「申」は上海の古称。「申江」とは淀山湖を水源とし上海市街地の下流で長江に合流する黄浦江兩岸地区を指す。

申江旧話

申(さる)は楽しく跳び去り、酉(とり)は夜明けを告げにくる。まさに「光陰矢の如し」だ！
人は年をとると過去を追想する。追想することは過去に未練を持つことと同じではない。過去はすべて悪いものではなく、追想もただ苦痛に触れるだけとは限らない。追想は時には人に力を与える。励まし前進する力を与えてくれる。

ここ数年、私は常に追憶の中に深く沈んでいる。追憶の中から慰めを得て、教訓を引き出したいと思っている。それで、昔の事を思い出して記憶を正すために、歩行が困難になったこの身を顧みず、共に過ごした人たちがいた場所を、自分が足跡を残した場所を訪ねること

にした。

私の半生は流浪の中で過ぎた。最終的には上海に落ちつき 36 年間で過ごした。上海は第二の故郷だ。とくに若いころ、私は上海で学び働いた。自分が持っていた思想と歩いた道が私に深い影響を与えているのは当然のことだが、それでも上海は私にとって思い出を掘り起こしたい重要な所である。

二年前の秋の終わりのある午後、私はたまたまなくなって、昔住んでいた場所を訪れた。記憶に従い、まず上海美術専門学校に行った。熟知している菜市路(現在の馬廠路)のつきあたりに位地する国内初の美術専門学校の建物に着いた。校門と校門の中の天井、窓と通りに面している並んだ窓。すべては変わっていなかった。ただ変わっていたのは、ここが工場になっていたことだった。私は歩道に立って食い入るように校門や二階の窓、壁を見つめた。私は、はるか離れたところにある記憶を捕らえようとするかのように、じっと見つづけていた。それはまるで昨日のできごとのようで……

1933 年の初秋、私は上海に来てすぐに美専(上海美術専門学校)の門をくぐった。あの上の階の教室で、勤勉に絵を学んだ。石膏像の木炭画を描いた、モデルを使った油絵を描いた、水墨画の中国画も描いた。宿舎は学校に隣接していて、学校の塀は大通りに面していた。あまり高くはなかった。しかし私はそれで苦い経験をしたことがある。

私は梅蘭芳(メイランファン)^①が大好きだったので、ある雨の夜何人かの同級生を誘い、いちばん安い切符を買って三階の席で一幕だけすばらしい公演を見た。終わって寮に帰ると校門にはすでに鍵がかけられていた。仕方なく同級生の肩を借りて塀を越えることにしたのだが、跳び下りて転倒した。そこは水たまりだったので全身が泥だらけになり、おまけに足をくじいた。それで長いあいだ痛みを苦しめられた。美専は私立の学校だったのでお金がかかり、絵画はさらにお金がかかるので貧乏人には学ぶことが難しかった。だが私は高校で絵画を勉強して基礎があったので編入試験を受けて入った。一年授業期間が少なければ一年分の授業料を節約することができるからだ。そして新聞や雑誌に投稿して原稿料をもらい、やっと費用を捻出することができた。

『女子月刊』^②編集主幹の黄心勉(ホァンシンミェン)はとても私に同情してくれて、いつも私の文章を載せてくれた。美専の教授の倪貽徳(ニーイードウ)^③と作家の葉靈風(イエリンホン)^④も文章を發表できるように助けてくれた。それから私は仕事を見つけた。天一電影公司(天一映画会社)^⑤が出版している『明星日報(スター日報)』で宣伝を担当することになったのだ。月給は 20 円でこれが私の経済問題を解決してくれた。昼間は学校へ行くことができるし夜間には働くことができる。ただ残念なことに、こうなると絵を描くことに専念できなくなった。美専は夜の出入りができなかったので、私は近くの杜(ドウ)神父路(現在の永年路)の裏通りに中二階の部屋を借りて寝泊まりすることにした。

私はその中二階の部屋のことを思い出し、すぐに杜神父路を探した。すぐにあの短い横町を見分けることができた。番地は覚えていなかったが、住んでいたところが横町の端っこの一軒だったことを覚えていた。部屋の又貸し人は技師の妻だったと思う。一日中そろばん計算をしているような人で、一か月経たないうちに家賃を取りに来て、夜は八時過ぎには電灯を消すように口うるさく言った。どのみち私は夜には天一(天一電影公司)に行っていたのでか

まわなかった。天一の映画宣伝のため、私はスタジオの中での撮影をずっと見ていなければならなかった。そして監督やスターを取材し、下書きを書いてようやく家に帰ることができた。よく徹夜仕事になって、急いで美専に行き、昼ごろ家に帰って休んだ。

当時は劇作家の洪深(ホンシェン)⑤、左明(ズオミン)、于思(ユースイ)などが脚本家であり監督であった。彼らは私が苦しい生活をしているのを知って、私のために天一の経営者で映画監督の邵醉翁(シャオズイウオン)⑥と交渉して、「私を彼の家の中二階に住ませること、家賃は取らない、朝食を一度与える」ということになった。それで私は引っ越しをして杜(ドゥ)神父路の中二階の部屋に住むことになった。しかし邵家に住む条件として、毎日邵家の娘陳玉梅(チェンユーメイ)(有名な映画スター)に北京語を教えることになった。彼女は蘇州人で普通語がうまくなかったからだ。

思い出す順序に従って私の足は自然と天一があった場所に向かっていた。菜市路の24路から電車に乗り復興中路で下り、上海映画館を越してすぐのところが甘世東路(今の嘉善路)だ。しかし天一は痕跡もなくなっていた。ただ邵醉翁が住んでいた横町があったが、その家がどこであったかはわからなくなっていた。私はぶらぶらと歩きつづけた。そして47年前、映画界に足を踏み入れるきっかけを作ってくれたこの場所のことを懐かしく偲んだ。

私は悲しい気持ちになり、ここで夜通し眠らずに汗を流して働いていた何人かの友人を思った。彼らは中国映画界の初期の段階で、忘れることのできない貢献をした人たちだった。彼らは次々と世を去っていた。邵醉翁も10年の動乱(文革を指す)の中で病死した！懐かしさと悲しさが私の中にあつた辛い憂うつな気持ちを掘り起こし、私はただ黙って溜息をつくしかなかった。「人生は朝露のごとし」だ。しかし歴史は朽ちることはない！

最後に、昔の薩坡賽路(現在の淡水路)までゆっくりと探し歩き、やっとのことで大通りに面した西向きの古い洋館を見つけた。ここにはかつて「女子書店」の編集部があり、私は1935年に編集者として働いていた。

二階のベランダを見上げると、長いあいだ会っていなかった今は亡き人の姿が見えるような気がした。私はこのベランダ部屋で厳しいひと冬を過ごした。骨を突き刺すような寒さの中、天井に付いているわずか十五ワットの電灯の下で昼も夜も他人の原稿を読み、校閲し、自分の文章を書いた。

徹夜で仕事をし、タバコやコーヒーで眠気を覚ましていたので、この時期に体がとても悪くなった。翌年の春には社長の姚名達(ヤオミンダー)⑦(復旦大学教授でもあった)が、書庫の中で仕事ができるようにしてくれた。

学者が開いた書店の窮状、というのは想像に難くない。私はぼんやりとあの時代の苦境を思い起こしていた。そして多くの困難が私の成長を促してくれたことがはっきりと分かった。私は困難には感謝しなければならないのだ！

どれくらいベランダの前に立っていたのだろう。だんだんあたりが暗くなり足がだるくなってきたので、やっとそこを離れることにした。日没の残照の中を私はよろよろと歩きながら帰途についた。

若者たちのいくつかの群が歩道を後ろから駆けてきた。私はあわてて道を譲った。そして

血気盛んな彼らの高揚が伝わってくる後ろ姿を目にし、思わず彼らを賛美し、劉禹錫⑧の二つの詩を声に出して読んだ。

「沈舟側畔千帆過、病樹前頭萬木春！（沈んだ小舟のそばを多くの帆船が通り過ぎていく。枯れ木や病んだ木を前にして多くの木々が春を迎えている。）」

1981年春節前夜、上海にて（酉年）

①梅蘭芳（メイランファン 1904-1961）……女形として世界的に有名な京劇俳優。京劇の近代化を推進した。

②『女子月刊』……姚名達と黄心勉夫妻によって1933年3月8日に創刊された女性の意見を掲載する雑誌。「女子書店」は『女子月刊』を代理販売するために4月1日に設立された。

③倪貽徳（1901-1970）……油絵画家。1927年に日本に留学して新流派絵画の研究と美術史論を研究した。

④葉靈鳳（1905～1975）……作家・画家。上海美術専門学校卒業。魯迅から唯美的傾向を持つ作風を批判された。

⑤天一電影公司（天一影片公司）……1925年に邵醉翁とその兄弟によって上海で設立された映画会社。古典に題材を採る映画を製作し、シンガポールやマレーシアでも人気を博した。30年代になると左翼映画運動の影響を受けた映画も作りはじめた。1937年には弟が責任者になりその後拠点を香港に移して香港映画の基礎を築いた。

⑥洪深（1894—1955）……劇作家、演出家。ハーバード大学などで作劇、演出を学び、中国の演劇の水準を高めた功労者。

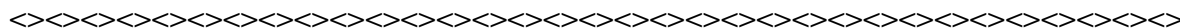
⑦邵醉翁（1896—1975）……中国と香港の映画事業の開拓者。銀行家、弁護士でもあった。

⑧姚名達（1905-1942）……歴史学家、目録学研究家。1934年から1937年まで復旦大学歴史学研究法教授を務めた。1942年、日本軍の爆撃に遭って死亡。

⑧中唐期の詩人・政治家の劉禹錫（772-842）の詠んだ七言詩の中の一節。

「巴山楚水淒涼地，二十三年棄置身。懷旧空吟聞笛賦，到郷翻似爛柯人。

沈舟側畔千帆過，病樹前頭萬木春。今日聽君歌一曲，暫凭杯酒長精神。」



申江话旧

（中国語原文）

申猴欢跃而去，酉鸡报晓而至，流光似箭！

人老了，总爱缅怀过去，缅怀过去不等于留恋过去；“过去”不一定是坏的，“缅怀”也未必只能触及痛苦；有时缅怀会给人以力量，一种鼓舞前进的力量。

这几年，我常沉醉于往事的回忆里，我想从回忆里求点安慰，也想从回忆里吸取教训。我为

了追忆一些往事,要使回忆较能真切准确,便不顾步履艰难,亲自走访那与我共过事的人,和留过足迹的地方。

一生中,我的天半时间是在颠沛流浪里度过;而客居最久,又终于定居下来的是上海;屈指算来,已断续在上海住了三十六七年光景,因此上海可以说是我的第二故乡。尤其青年时代,我曾上海学习、工作;无论是思想和后来的生活道路,都对我有着深刻的影响,于是上海又成为我生平回忆的一个重点。

两年前的暮秋,一天下午,我怀着渴念的心情,走访了睽违很久的上海旧居之地。我按着经历循序,首先走访上海美专旧址。我熟稔地在菜市路的尽头,我到了那幢曾是国内最早的美术学府的楼房;大门和门内的天井;院墙和楼上朝街的一排木框窗子;都没有什么变化,变化的是,这里已经改成工厂了。我伫立于对面行人道上,我贪婪地注视着那大门,那楼上的窗子,那院墙;我捕捉着仿佛距离遥远,又仿佛就是昨天的记忆……

一九三三年的初秋,我来到上海,就一头钻进了“美专”大门。在那楼上的课堂里,我勤奋地学画;我画过石膏木炭画,画过模特儿油画,也画过水墨丹青的国画。宿舍楼房在院墙旁边,院墙临马路,不太高,可我吃过它的苦头。那是一个雨夜,我因仰慕梅兰芳的艺术,约了几个同学去买了最低价的戏票,坐在三楼看了一场精彩的演出。散场以后回来晚了,校门已上锁;没办法,我就借助同学的肩胛爬上院墙,翻了过去;不料一下子跌到泥坑里,浑身沾满污水,腿关节伤了筋,痛了许久。由于“美专”是一所费钱的学校,绘画更花钞票,穷人实在读不起;所以我凭着中学的一点绘画基础,投考时便报名插班,为的少读一年可以省一年的学费。然而学习期间,我还得向报刊投稿鬻文,好赚些稿费贴补贴补。《女子月刊》主编黄心勉很同情我,她常发表我的文章。“美专”教授倪貽德和作家叶灵风,也常帮助我介绍发表文章。然后我又我到了工作,在天一电影公司,他们出版的《明星日报》担任宣传,月薪二十元,解决了我的经济问题。理想的是,我可以白天上学,晚间工作,半工半读,互不牵制。而遗憾的是,这样一来,我便不能专心学画了。为了“美专”晚间出入不方便,我就在附近杜神父路(今永年路)的一条弄堂里,租了一家楼上的亭子间住下来。

想起了亭子间,我立即离开菜市路,摸索到了杜神父路。很快便认出了那条短短的弄堂,虽已忘却门牌,但还依稀记得故居是弄堂的最后一家。二房东好像是一个工程师的妻子,成天挖空心思打小算盘,不满月就讨房钱,晚上刚过八点钟就强迫关电灯。反正我晚上要去“天一”工作。为了宣传“天一”出品的影片,我得呆在摄影棚里看拍戏,采访导演,明星,然后写成稿子才能回家。时常工作到通宵达旦,再赶往“美专”学习,中午始回家休息。当时戏剧家洪深、左明、于思等是“天一”的编剧,导演,他们看出我的艰苦,代我向老板邵醉翁(也是电影导演)交涉;让我住到他的家里,也是亭子间,不要房租还管一餐早饭。于是,我退租了杜神父路的亭子间。不过,住到邵家是有条件的,每天须教老板娘陈玉梅(著名电影明星)讲普通话,因为她是苏州人,讲不好普通话。

顺着思路,不期而然地我又急切去走访“天一”旧址。我从菜市路乘二十四路电车到复兴中

路下来,走过上海电影院不远,就是甘世东路(今嘉善路);可是“天一”的痕迹一点也没有了,只有邵醉翁住过的弄堂还在,而房子已无法辨识。我徘徊留连于这条弄堂,我怀念这里曾是我四十七年前开始迈进电影界的地方。我也哀思在这里彻夜不寐、流汗工作的几个老朋友;他们为早期的中国电影事业,做出了不可磨灭的贡献;而他们都已相继谢世了,邵醉翁也在十年动乱中病故!怀念和哀思撩起了我的辛酸,惆怅,我只有默默感喟地沉吟着:‘人生若朝露’,但历史是不朽的!

最后我缓步踱向昔日的萨坡赛路(今淡水路),我寻寻觅觅,好不容易找着了那幢临马路,座东朝西的旧式洋房,这里曾是“女子书店”的编辑部,一九三五年我做“女子书店”的编辑。举目眺望洋房二楼的阳台,宛如又看见了阔别已久的故人!我在这阳台上住过朔风凛烈的一冬,顶着刺骨的严寒,凭借一盏天花板上仅仅十五支光的电灯,日夜编阅别人的稿件,也撰写自己的文章。常常开夜车工作,就全靠香烟和咖啡提精神,因此这期间身体很坏。直至第二年春天,经理姚名达(又是“复旦”教授)才把我安排到一间堆书栈里。学者开书店的窘况,也就可以想像了。我如痴如梦地遐思回味那当时的困境,我意识到正是许多困境鞭策了我的成长,我应该感谢困境!

我不知道在阳台前面站立了多久,渐渐天色昏暗了,我的两腿也有些酸了,才转身离去。我踏着夕阳的余辉,踉踉蹒跚于归途;行人道上一群群青年熙熙攘攘地向前奔驰,我忙着为他们让路不迭;我注视他们意气风发的昂扬背影,不禁赞赏地欣然朗诵了刘禹锡的两句诗:

“沉舟侧畔千帆过,病树前头万木春!”

一九八一年春节前夕于上海(酉年)

